

「ウエストロード・ラブストーリー」

はじめに。

【本稿は「第三回新人シナリオコンクール」において最終選考まで残った作品を、月刊『シナリオ』2022年5月号にて掲載されております、拙作についての審査員の方々からいただいた選評をもとに、改稿したものです】

登場人物

高倉静真―焼鳥屋〈バラック〉店員

吉沢早智―アイドルグループ、エンジェルスのメンバー

市川美子―右同

杉原香奈―右同

松園翠―スナック〈ディアナ〉のホステス

佐村次郎―〈バラック〉店主

佐村琴絵―次郎の妻

花村浄雲―僧侶

花村浄悠―僧侶、浄雲の子

岡崎―エンジェルスのマネージャー

西画像タクシ―運転手

翔太―大学生

結衣―右同

その他

○走る京福電車

鳴滝ノ宇多野間、線路両脇に樹つ櫻が満開に咲き誇る中を走っていく京福電車。

○メインタイトル

《ウエストロード・ラブストーリー》

○京都市内・西大路通り

春。袈裟を着た若い僧侶が原付バイクを西大路通りを南へ走らせている。東西に走る三条通り、六角通りを過ぎて左に折れるバイク。

○焼き鳥屋〈バラック〉外景

古ぼけた看板の出ている焼鳥屋〈バラック〉。その店先でバイクを停める僧侶。

○前同・二階・六畳間

小さな座卓の前に袱紗に包まれた骨壺と、その横にお守りが置いてある。

隣の小さな写真立て。微笑んで映る若い男女の写真。その前で読経をしている花村浄悠

(28)。後ろで正座している佐村次郎(69)と妻の琴絵(67)。

× × ×

読経を終え、夫妻に向き直る浄悠。

次郎「すまんかったなボン、おおきに」

琴絵「どうぞ、お納めください」

お布施を差し出す琴絵。

浄悠「ありがとうございます」

お布施を懐にしまう浄悠。

次郎「浄雲は相変わらずの不養生か」

浄悠「はい。痛風治す気いなんか全然ありませんわ。足痛い、足痛い言いながら焼肉やら唐揚げやら豚キムチやらワシワシ食うてます。食べて免疫力つけて疫病撃退じゃ、いうて」

次郎「アホもそこまでいったら立派なもんやな。よう長年坊さんやっとなる」

浄悠「ほんまに、わが親ながら」  
笑う三人。

浄悠「まだ、納骨されませんか」

次郎「ああ、うん」

浄悠「父からお聞き及びや思いますが、うちの寺、二年前から無縁の仏様のお骨、納めさせてもろてます。父の親友の佐村さんにご縁のあった方です。静真さんのお骨、そろそろお納めされてはいかがですか」

次郎「ボンが言い出して始めたそうやな、それ」

浄悠「はい」

次郎「立派な心掛けや。浄雲の息子とは思えんわ。おおきに。いずれそうさせてもらうつもりや。けどまだ、わしらが元気でおるうちはな」

琴絵「うちの喘息、静真ちゃんがあつちに持つていつてくれた。おかげで二人して働けてる。その時が来たらお願いするわな」

浄悠「はい、いつでもおっしゃってください——けど、静真さん二十七やなんてねえ」

次郎「ああ、ほんまになあ」

浄悠「今の僕より若かつたんやなあ」

涙を拭う琴絵。

琴絵「ほんまに、ええ子やった。何年経つても思ひださへん日いなんかない」

浄悠、壁に貼られた三人組のアイドルグループ〈エンジェルズ〉とそのメンバー吉沢早智のポス



次郎「串打ちの三年は済んだ。俺も四年目から焼き任された」

ニヤツと笑つて静真を見てから店を出ていく次郎。じつと立っている静真。やがて二階への階段を上つていく。

○前同・二階六畳間(夜)

殺風景な部屋。カンカンと響く踏切の音。電気を点け、窓を開ける静真。京福電鉄の二両電車が通つていくのをじつと見る。電車が行き過ぎてしまひ、窓を閉める静真。服を脱ぎ、ランニングシャツとブリーフ一枚になり、床に畳んでいた布団を敷く。電気を消し、寢床に入る静真。

○(バラック)店内

店内の掃除をしている静真。買い物袋を提げて入つてくる次郎。

静真「おはようございます」

次郎「ああ、おはよう。静真よ」

静真「はい」

次郎「西院の駅前でこんなもん配つてたわ」

静真にチラシを手渡す次郎。ミニスカートの女の子三人が横並びで立ち、肩に手を置いて片足上げのポーズを決め微笑んでいる写真のチラシ。

「エンジェルズ」のロゴが大きく。

静真「なんですか、これ」

次郎「三時から三条会館の駐輪場で歌うんやつてよ。書いたあるやろ」

またチラシに目を落とす静真。

「本日京都キャンペーンツアー」の文字が目に入る。

静真「駐輪場つて、自転車か」

次郎「定休日や。有名なんか？ そのエンジェルズ云う子ら」

静真「さあ。そういうの、詳しいないから」

次郎「パチンコ屋の駐輪場で歌うくらいや。たかがしれてるなあ」

静真「はあ、そうですね」

次郎「行つてこいや」

静真「え」

次郎「かまへん」

静真「ええですよ。こんな興味ないですし」

次郎「すぐそこやないか。暇つぶしに行つてこい。仕込みは俺一人でやつとく。可愛いねーちゃんのアンヨ見えてこいや。パンツも見えるか分からんぞ」

屈託なく笑つ次郎を複雑な顔で見る静真。チラシを見る。微笑み浮かべている左端の女の子をじつと見る。

○三条会館・駐輪場

小さな演台が組まれている。その前に集まつて立っている三十人ほどの観客。その中に静真もいる。駆け足でステージに登場する「エンジェルズ」の三人。フリフリ衣装にミニスカート姿。センターに市川美子(19)向かつて右に杉原香奈(19)。左に吉沢早智(19)。三人、観客に向かつて。まばらな拍手。

美子・香奈・早智「みなさん、こんにちばー！」

美子「市川美子、ミコですー！」

香奈「杉原香奈、カナですー！」

早智「吉沢早智、サチですー！」

美子「三人そろつてー！」

美子・香奈・早智「エンジェルズですー！」

美子「聴いてください！ わたしたちの

デビュー曲、『ラッキーガールにご用心！』

イントロに続き、唄い、踊りだす三人。左端の早智から目を離せないでいる静真。

× × ×

ステージが終わり、駐輪場を出ていく観客たち。

三人が、画板を肩掛けにして呼びかけている。

美子「ファンクラブ、入ってくださいーい。千円で入れま

ーす」

香奈「特典いっぱいあります」

早智「今日入会された方は、永年会員です」

呼びかけ続ける三人。立ち止まって早智を見てい

る静真。早智、静真に気づく。静真を見て。

早智「ファンクラブ、入つていただけませんかっ！」

静真「あ、はあ……」

早智の前に立つ静真。

早智「ありがとうございます！ うれしいです！」

静真「あ、はい……」

早智に千円を渡し、画板に置かれた紙に、氏名

住所、年齢、電話番号を書いていく静真。それを

早智、じつと見て。

早智「焼き鳥屋、バラック……そこがお家？」

顔を上げる静真。早智を見る。微笑んで静真を見

ている早智。

静真「あ、いや。住み込みで。その一階に住まわせて

もらつてて」

早智「じゃあわたしといっしょだ」

静真「え」

早智「わたしも、社長の家の二階に住まわせてもらつて

るの」

静真「そうなんや」

早智「そうなん」

早智「おかしな関西弁の発音で。」

早智「十九歳か。私たちと同じ年だね」

静真「そうなんや」

早智「そうなん」

笑う二人。

早智「これからもエンジェルスを応援してください！

えつと……高倉静真さん！」

両手を差し出す早智。おずおずと右手を差し出す静

真。早智、その時に静真の右手指の痣に気づく。そ

れを察する静真。早智を見る。

早智「いっしょだ」

静真「え？」

早智「普段はファンデーションで隠して

るんだけどさ」

ハンカチを取り出し、それで右手小指を擦る早智。

爪の下から二ミリほどの赤い痣が、指の下まで走

っている。

早智「生まれつきなの」

静真「ほくも」

早智「わたしの方がちよつと赤いね」

静真「ほくの方がちよつと長い」

二人、見つめあつて。

早智、差し出された静真の右手を握る。左手も重

ねて両手で強く握る。

○西大路通り・歩道

丸めたポスターを手に歩いていく静真。

○〈バラック〉二階・六畳間

三人の直筆サインが書かれたエンジェルスのポス

ターを壁にピン留めする静真。それを見やる。微

笑む早智をじつと見つめる。

○〈バラック〉店内（夜）

営業中。テーブル席に二組の客。厨房の中にいる

静真と次郎。鶏を焼いている静真。

次郎「かわいかったか」

静真「え」

次郎「そやからなんたらつて云うアイドルのグループ

よ」

静真「はあ、まあ」

次郎「パンツ見えたか」

静真「見えませんよ、そんなん」

次郎「ははっ、そうか。どの子がいちばんかわいかつ

た？」

静真「どの子つて」

次郎「帰つてきてからなんとのうボーつとしとる、お

まえ。どの子がよかつた？」

静真「——早智つて子がかわいかったです」

次郎「はははっ、そうか。早智ちゃんか。なあ、見に行

つてよかつたやろ」

無言で鶏を焼き続ける静真。

扉が開く。

次郎「はい、いらつしゃい」

入ってきたのは常連客の松園翠（27）。カウン

ター席に座る。

翠「うちはチーママ。静真ちゃんはチー大将。なー」

次郎「なんや、それ」

翠「焼き任されたちつこい大将、チー大将や。なー」

静真、焼き台の上に手羽先を四つ置いて行く。

翠「チー大将の童貞、うちがいつでも貰たるで」

次郎「翠ちゃんのつけ入るスキはない。こいつはいま早

智ちゃんとやらの夢中や」

翠「ええつ、誰それ！ 静真ちゃん好きな女の子できた

んー？」

色めきたつ翠。

静真「そんなやないですよ。やめてください、ほん

まに……」

次郎「すまんすまん、いちびりすぎた」

翠「えー、早智ちゃんてだれー。気になるわあ。教えて

よ静真ちゃん」

無言で手羽先を焼いていく静真。

○西大路通り・歩道【日替わり】

買い物袋を籠に入れ、自転車をこいでいる静真。

三条会館の前で立ち止まる。自転車でいっぱいの

駐輪場を見る。

●静真の回想

手を握り合っている静真と早智

静真、歩き出す。

○〈バラック〉裏

排水溝の清掃をしている静真。溜まったヘドロを

掬い取り、ポリバケツのビニール袋に移し替えて

いる。

○〈バラック〉店内（夜）

営業中の店内。カウンターに僧侶、花村浄雲（3

2）。上下スウェット姿で飲んでる。

焼き台の前で鳥を焼いているのは静真。厨房の中、

次郎がコップ酒を傾けながら、浄雲と競馬談義を  
している。

浄雲「あー、それにしても桜花賞のダイアナソロンには  
やられたわ」

次郎「そやから言つたやろ。田原買わなあかんつて。今  
いちばん乗れてるんやから」

浄雲「今週のダービーは？ ジロちゃん」

次郎「皐月賞といつしよや。シンボリルドルフで鉄板。  
あれはモノが違うで」

浄雲「ミスターシービーと比べたらどうや？」

次郎「ルドルフが上やろな」

浄雲「ほんまか？ そしたら二年連続三冠馬が出るっ  
て？」

次郎「やろうな」

浄雲「あるかあ、それ」

次郎「ある。大ありや。あれは名を残す馬や」

次郎、振り返って静真に。

次郎「一本出してみたい」

静真「あ、はい」

静真が差し出したモモ串を手にし、しばらく見て  
いる次郎。口に運んで。

次郎「ルドルフも四歳、おまえもここに来て四年目や  
な」

静真「はい」

次郎「ようこここまで来た」

静真「ありがとうございます」

浄雲「ほな、バラックのシンボリルドルフやな、静真ち  
ゃんは」

次郎「焼きは一生やぞ、静真。性根入れろよ」

静真「はい」

浄雲「なあ、静真ちゃんがルドルフやったらジロちゃん

はなんや？」

次郎「俺か。俺はシンザンや」

浄雲「また古いなあ、おい」

次郎「生まれ生臭坊主」

浄雲「祇園でお茶屋遊びもできん貧乏寺の住職に、それ  
は言つたらアカンで、ジロちゃん」

笑う次郎と浄雲。静真も笑顔をみせる。

○（バラック）表

おかもちを手にして出てくる静真。

○路上

京福電鉄線路沿いの路を歩いて行く静真。踏切ま  
でくる。遮断機が下りている。通過する一両電車。

遮断機が開き、踏切を渡る静真。六角通りをまっ  
すぐ歩いて行く静真。

○（あかつきハイツ）下

二階建てのアパート。外階段を上がっていく静真。

○前同・二〇三号室前

ブザーを押す静真。

少しの間の後、出てくるTシャツ、ホットパンツ

姿の翠。

翠「ごめんな、営業時間やないのに。入って」

中に入る静真。

○前同・玄関

男物の靴が脱がれてあるのをチラッと見る静真。

奥から聞こえるテレビの音。おかもちを置き、ラ  
ップをかけた焼き鳥の乗った皿を取り出していく。

五つ並ぶ皿。

翠「モモやらツクネやらしようもないやろ。うちがし  
っかり舌の教育したらなあかん思ってるねん」

静真「はあ」

翠「静真ちゃんが焼いてくれたん？」

静真「あ、はい。師匠任入れに行ってるんで」

翠「そうかあ。もう一人前やなあ」

静真「まだまだです——えっと、合計で千五百六十円に  
なります」

千円札二枚を差し出す翠。

翠「おつりはいらん、言うても受け取らんやろやろな  
あ」

静真「師匠にしかられますから」

用意してた小銭を翠に渡す静真。

翠「固いこっちゃ。そしたら、これはようがんばって  
る静真ちゃんへのうちからのチップ」

五千円札を静真が着ている白衣の胸ポケットにね  
じ込む翠。

静真「いや、こんなんダメです」

静真、五千円札を翠に返そうとするが、翠、その  
手を押さえて。

翠「うちの気持ちや。ほんまに静真ちゃんよう頑張つて  
る。あんた見たらうちも頑張らなつて素直に思えるん  
や。女の気持ちムダにするような男はカスやで。よう  
覚えとき」

静真、翠をじつと見る。翠、目をそらさない。

静真「すみません」

翠「うん。大将には内緒やで。二人の秘密や」

静真の唇に人差し指を当てる翠。

小さく頷く静真。

翠「ふふ。なあ、お酒飲めるようになった？」

静真「いえ、ぜんぜん」

翠「ほんまに真面目っ子やなあ。店おいでも言われへんやん」

笑う翠。

静真「すみません」

翠「いや、謝らなくてもええけどやな」

翠の笑顔を見ている静真。

○へバラックへ二階・静真の部屋（夜）

部屋の電気をつけたまま、布団の上でボーツと天井を見ている静真。床に置いた小さなラジオから響くディスクジョッキーの声。

DJ「へはい、じゃあ次のリクエストまいりましょう。

京都市は右京区のペンネーム、バラックさんからのリクエスト、エンジェルズでデビュー曲『ラッキーガールにご用心』」

ガバツと起き上がる静真。イントロが流れ出す。

首を振りリズムを取りながら、曲を聴く。壁のポスターを見る。早智を見る。うれしそうに笑う静真。

○へバラックへ店内

準備中。仕込みをしている次郎と静真。

黒電話が鳴る。受話器を取る次郎。

次郎「はい、へバラックです——え、おりますが。

あの、失礼ですがそちらさまは——はい。じゃあ、

換わりませう——静真

静真「はい」

次郎「おまえに電話や」

静真「ほくに？」

次郎「吉沢早智さんって言うてはる」

静真「は？ え？ なんですって？」

次郎「そやから吉沢さんや。早よせえ」静真、受話器を受け取り、耳に当てる。

静真「あの、もしもし」

早智（声）「へ高倉くん？ あー、いたー、よかったー。

すっごいドキドキしちゃった。エンジェルズのサチ

です」

静真「え、あ、あの」

早智（声）「へごめんね急に。びっくりしたよね。わたし、ずっと控えて持ってたの、高倉君の住所と電話番号」

号」

静真「持ってたって——」

仕込みに戻る次郎だが、静真の電話が気になつて

仕方がない。

○京都・四條河原町阪急百貨店・世界地図の前

立っている静真に、二人の電話の音が重なつて。

早智（声）「へ明日、会えないかな」

静真（声）「へいや、会うって」

早智（声）「へキャンペンで大阪に来てるの。明日オ

フなんだ。三人で関西観光するつもりだったんだけど

……」

静真（声）「へあ、あの」

早智（声）「へお仕事で、忙しいかな」

静真（声）「へいや、明日は定休日……」

早智（声）「へやった！ じゃあ会おうよ」

静真（声）「へ——はい」

地下からの階段を駆け上がった早智が走つて

くる。静真の前に立つ。

早智「待った、高倉君——」

満面の笑みの早智を呆然と見ている静真。

○四條河原町・交差点・横断歩道上

並んで歩いている静真と早智。

静真「あの、なんで」

早智「なんでって、なにが？」

静真「いや、だから……」

痣の右手をかざし静真に見せる早智。

早智「今日はわたしもこれ」

にっこり笑う早智。

○四條河原町の純喫茶・店内

テーブル席に座り、向かいあって座っている静真

と早智。サンドイッチとミルクティーの早智。コ

ーヒーの静真。

早智「聴いてたんだよ、あのラジオ」

静真「え」

早智「京都市右京区、ペンネーム、バラックさん」

静真「あ」

早智「キャンペンのときはいつも三人いっしょの部屋

で寝てるの。だから、みんな聴いてた。すごく嬉

しかった。高倉君のこと、美子と香奈に話したの。

高倉のこと忘れられないって、言ったの」

静真「——」

早智「そしたら二人、絶対会ってこいって。三人でどこ

か行くなんでいつでもできるからって言ってくれて

さ。だから、電話したの」

静真を見る早智。

早智「高倉君は、わたしに会いたくなかった？」

微笑んでいる早智を見る静真。

静真「会えるやなんて、思ってへんかったし」

早智「でも、会えたやん」

早智 おかしなアクセントで。静真 笑う。早智も笑う。

早智「ねえ、どこ連れてってくれる？」

静真「え、どこって」

早智「デートなんだからエスコートしてよ」

静真「デート……」

早智「初デートだからね、わたし」

早智を見る静真。

静真「——じゃあ、映画、とか」

早智「『じゃあ』ってなによお。なんかやつつけー。とりあえず映画って言うてりゃいいって思っ

てな

静真「そんなこと、ない」

早智「ほんとに？」

静真「うん。絶対、ない。ほく、吉沢さんと映画観たい」

早智 笑って。

早智「なに観よっか」

静真「いま、なにやってるんやろ」

早智「知らない。でも、ずっと覚えてるの観たい」

静真「ずっと覚えてるの？」

早智「うん。これからも観たことずっとずっと覚えてるの、そんな映画」

微笑む早智をじっと見る静真。

静真「新京極に、むかしの外国の映画やってる映画館、あつたと思う」

早智「へえ！ どんなのやってるの？」

静真「さあ。前、通りかかったことあるだけやから。映画とか詳しいないし」

早智「そっか。じゃあ、とりあえずそこに行ってみようよ」

静真「うん」

コーヒーをすする静真。

早智「はい」

サンドイッチをひとつさしだす早智。

静真「え」

早智「高倉くんもひとつ食べなよ」

静真「——うん」

サンドイッチを手に取り、口に運ぶ静真。

早智「おいしい？」

静真「うん」

早智「ふふふ」

笑う早智。

○新京極通り

並んで歩いて行く二人。

○前同・名画座の前

名画座の入り口に立つ二人。

早智「ここか。なんか普通の映画館と違って、レトロ

ない感じだね」

受け付け横のショーケースに『冒険者たち』の

ポスターが貼られている。

早智「『冒険者たち』十時半からだって。これ、観ようよ」

静真「うん」

受付前に立つ二人。

○名画座・劇場内

空席の目立つ劇場内で『冒険者たち』を観ている

静真と早智。亡くなったジョアンナ・シムカス演

じるレイシアが海中へ沈んでいく場面をじっと

見つめる二人。

涙を零す 早智。そっと静真の手を握る。驚き早

智を見る静真。スクリーンを見つめたままにいる

早智。静真、その手を握り返す。

○名画座・外

出てくる二人。新京極通りを歩いていく。静真

早智の手を握る。静真を見る早智、その手を握り

返す。二人、手を固くつないで新京極通りを歩いて行く。

静真「アラン・ドロン、やっぱり男前やなあ。女優はな

んて名前やっただけ。さっきモギリのオバちゃんに

訊いてたやろ」

早智「ジョアンナ・シムカス。すごい美人だったね」

静真「一生忘れへん映画になった？」

早智「——うん」

静真「ほくもや——もう、十二時過ぎたわ。なにか食べ

よか。食べたいもんある？」

早智「んー、そうだな——一生覚えてるやつ」

静真「そればかりやん」

早智「あかんのん」

静真「関西弁下手くそすぎて気持ち悪いわ」

早智「あー、『気持ち悪い』とか言うー？」

二人、じゃれあうように歩いて行く。

○寺町通り・とんかつ屋へなぎさ〱前

店前に立つ二人。

静真「とんかつとか、おかしかな」

早智「ううん。べつにいいけど。高倉君、ここに来たこ

とあるの？」

静真「何回も」

早智「そうなんだ。おいしいんだね」

静真「めっちゃくちゃ。このとんかつ食べたら、よそのとんかつ食べられへん」

早智「ほんとに！ じゃあここにしよう！」

店に入る二人。

○前同・店内

時分時を少し過ぎ、店にいるのは数名の客。向かい合ってテーブル席に座っている静真と早智。とんかつ定食が運ばれてきて、二人の前に置かれる。

早智「ほんとにおいしそう。いただきまーす」

食べ始める二人。

静真「どう？」

早智「……うん」

静真「『うん』って」

早智「ちよつと言葉が出ない」

静真「やろ」

早智「なんかね、カリってなってジュワッってなる」

静真「うん、カリってなってジュワッってなるやろ」

笑う二人。

早智「お家の人といっしょにきてたんだね」

首を横に振る静真。

静真「ぼく、施設育ちやから。中学出てバラックで住み込みで働き始めてすぐ、師匠が連れてきてくれてん。

『食い物扱う人生が始まるんやから、ほんまに旨いもん知っておかなあかん』いうて」

えっ、とした顔で静真を見る早智。

静真「父親はぼくが二つのときに死んで、母親はその後

すぐに他の男の人とどこか行ったそうや」

早智「——あの、あの、ごめんなきい」

静真「ええねん、ええねん。こつちこそごめん。なにを言うてんねや。食べよ。なあ、一生忘れへんやろ、この味は」

早智「うん。この味は永遠に覚えてるよ」

二人、とんかつ定食を旨そうに食べていく。

○前同・店前

出てくる二人。

早智「あー、おいしかったー！ ほんとにおいしかったー！」

静真「やろお」

早智「もうどんどんかつ食べてもおいしいと思わないかもなあ——高倉君のせいだ」

静真「ははは」

二人、手をつなぎ、歩いて行く。

○錦市場商店街

商店街の中を歩く二人。様々な店に目を奪われ、

歓声をあげる早智。

早智「すっごいね！ ほんとすっごいねこ。わたし

こういうところ大好き！」

静真「変わってるなあ」

早智「そんなことないよお」

静真「そしたら、美子ちゃんや香奈ちゃんがここ来たら

そんなに喜ぶか？」

早智「え——うーん、それはないかも」

静真「やろお」

早智「もう、わたしが楽しいんだから、それでいいっ！」

楽し気に歩いて行く二人。

○錦湯の前

商店街を出、手を繋いで歩いて行く二人。

銭湯（錦湯）の前まで来る。男湯、女湯の暖簾が出ている。

早智「お風呂屋さんだ」

静真「うん、ここはぼくも知らなかった」

早智「すっごい風情のある建物だよ」

静真「うん」

早智「ねえ、入ろっか」

静真「え、入るって……」

早智「だからここ。お風呂屋さん」

静真「いや、そやかてタオルもなにも持ってへんし」

早智「売ってるかもよ。ちよつと訊いてくる！」

女湯の暖簾をくぐり中に入る早智。しばらくしてから暖簾から顔を出し。

早智「タオルもシャンプーもリンスも売ってるって！

ねえ、入ろっ！」

○前同・男湯・浴場

椅子に座り、体を洗っている静真。

早智（声）「高倉くん」

静真「なんやー」

早智（声）「貸し切りだよー」

静真「こつちもやー」

早智（声）「高倉くん」

静真「なんやー」

早智（声）「わたし、楽しいー！」

静真「ぼくもやー」

早智（声）「あはははっ」

響く早智の笑い声を笑って聞いている静真。

○前同・前の路上

風呂から上がり、早智を待っている静真。

暖簾を開け出てくる早智。

早智「お待たせ」

湯上りの早智に見惚れる静真。

早智「ん？」

静真「いや——」

静真、早智の手を取る。腕を絡める。一瞬驚く早

智だが、身を寄せる。二人、身歩きだす。

早智「高倉くん」

静真「なに」

早智「ここまで、だからね」

静真「え」

早智、少し笑いで、まっすぐ前を見ている。

静真「——分かってるよ、そんなん。なに言ってるんねん

な」

早智「ありがとう。高倉君、優しいね。すごい優しいね。

やっぱり高倉君、思ってたとおりの人だった——ねえ。

少しゆっくり話しがしたい」

静真「うん」

腕を組み歩いていく二人。

○鴨川の河川敷

河川敷に座っている静真と早智。

早智「今日は本当にありがとう」

静真「いや、こっちこそ」

早智「急に電話かかってきてびっくりしたよね」

静真「え、そりゃまあ。芸能人から電

話かかってくるなんて思ってたし」

早智「芸能人かあ。まだまだヒョコ子だけだ。パチンコ

屋さんとかレコード屋さんの前とかで歌ってるレベル

だし。こうやって道歩いてても誰も気づかないし。で

もね、高倉君。わたしたち、絶対売れるの。売れなき

やならないの」

早智を見つめる静真。

早智「わたしの家、すごく貧乏なの。オンボロのパー

トに家族三人住んでさ。お父さん病気で体壊して内

職しかできなくて。だからお母さんの工場仕事の収入

でなんとかやりくりしてさ。そんなんだから、わたし

も中学出たら働くんだらうなって思ってた。でも中学

の音楽の先生がね『おまえには歌の才能がある。絶対

音感も持つてる。生かさなきゃもったいない』って言

ってくれてさ。放課後、個人的に歌のレッスンしてく

れたんだ。でさ、わたしダメモトで今の事務所の養成

所の試験受けてみたの」

静真「そうなんや」

早智「そのときいっしょに受かったのが美子と香奈、三

十人くらい受かったんだけどね、この三年間でほとん

どの子がやめた。わたしたち特待生だったんだよ、す

ごいでしょ。」

静真「特待生」

早智「うん。レッスン料や通所の交通費全額免除。そう

じゃなきゃ三人とも養成所に通えてない」

静真「三人とも？」

早智「うん。美子と香奈もわたしといっしょで、お金持

ってる家の子じゃないんだ。美子はお母さんしかいな

くなつた家の六人きょうだいの長女。香奈の家なんか、

お父さんが賭け事はっかりやって毎晩借金取りが来

てたって言った。だから、わたしたち、絶対に売れ

なきゃならないの。負けるわけにはいかないの」

静真「特待生やもんな」

早智「うん。でもさ、朝から晩までレッスン漬けだった

わたしたちが、高校行きながら通ってた子たちに負け

るわけなかったんだよね。だからこれからも絶対勝

つんだよ、わたしたち」

静真「ご両親は芸能界に入るのに反対せえへんかった

の？」

早智「最初はびっくりしたみたいだけど、

お父さんが『やらずに悔い残すくらいならやってみ

ろ』って。お母さんも『ダメだったら戻ってきて三人

で貧乏したらいい』っていつてくれてさ」

静真「へえ」

早智「高倉君はどうして今のお店に？」

静真「ほく？ ほくは施設の職員さんが師匠の知り合い

で。いつまでも施設にいるのもなんか嫌やつたし。早

くなにか手に職つけたかったし。店の二階に住まわせ

てくれるっていうから、それで」

早智「師匠って、おじいさん？」

静真「ううん、まだ三十ちよつと」

早智「へえ、若いんだね。師匠とか言うから、なんかヨ

ボヨボのお年寄り想像しちゃった」

笑う二人。

静真「『見て覚えるなんていうのはもう古い。俺がいか

ら丁寧に教える』いうて仕込んでもらうた。若いけ

ど最高の師匠や」

早智「じゃあ、いつか師匠超えなきゃね」

静真「いやあ、それは無理やなあ。何年かかっても師匠

の焼く串は超えられんやろうなあ」

早智「無理なんて言っちゃだめだよ。目指して頑張らな

きゃ」

早智を見る静真。微笑んでいる早智。

静真「吉沢さん、やっぱりなんかすごいなあ」

早智「高倉君」

静真「なに」

早智「わたし小五のとき脳腫瘍の手術してるの」

静真「脳腫瘍——」

早智「うん。けっこうな大手術でさ。大病院でね、脳

外科のすごい偉いお医者さんが執刀したんだ」

静真「うん」

早智「でも、わたしの家、そんなのじゃない。だから

お母さん、仕事増やしてさ、新聞配達とかもやって、

夜はスナックでも働いてたの」

静真「——」

早智「お父さんも内職の仕事増やしてさ。二人とも本当

に寝る間もないくらい働いた。お母さんもお父さんも

言わないけど、わたし、知ってるんだ、二人が親戚中

まわって頭下げてお金借りたの。ぜんぶわたしのため

よ——だから、だからね高倉君。わたし二人に恩返し

するの。絶対いい暮らしさせてあげるの——両親のこ

ととか言って、ごめんね」

首を横に振る静真。

早智「デビューが決まった日に三人で誓ったんだ。青春

の全てを賭けよう、捧げよう、そして絶対成功しよう

って。クサイ？ 笑う？」

静真「笑わへんよ。笑うわけじゃないやん」

早智「ありがとう。あのね、わたしたち五年後の解散を

決めてるんだ」

静真「え」

早智「ねえ、高倉君。マラソンランナーはなんで走れる

んだと思う？」

静真「なんでって、そりゃ完走してゴールするためや

ろ」

早智「でしょ。ゴールがあるから走れる。わたしたち

だってそうよ。ゴールに向かって走り出したの。五年

後って決めたの。ひたすら走って、売れて、成功

して、五年後エンジェルスは横浜スタジアムで燃え尽

きるの」

静真「横浜スタジアム？」

早智「三人とも神奈川県出身なの。わたしは川崎、ミコは

横須賀、カナは厚木。だから」

静真「へえ」

早智「横浜以外の神奈川県にとつて、横浜ってちょつ

と特別な街なんだ。憧れと嫉妬が混じってるみたいな

さ。だから、最後に横浜スタジアム制圧してやるん

だ」

静真「かつこええやん」

早智「かつこええやろお」

笑う二人。

早智「わたし、エンジェルのサチとして生きるの、

これから」

静真「——うん」

早智「だからわたしね、その前に吉沢早智の最高の思い

出を作ったかった。だから、高倉君に電話したんだ——

——この指さ」

右手小指を立てる早智。

静真「うん」

早智「学校行く前お母さんがファンデ塗って痣隠してく

れてたんだ。たまに『こんな指に生んじゃってごめ

んね』なんて言ったりして。わたしはそんなに気に

してなかったんだけど。でもまあ気にしてなくもな

かった」

静真「うん。分かるわ、その気持ち」

早智「でも、でもね。高倉君に出会えて、この指でよか

ったって、そう思えたの。なんか、同じ指の、高倉君  
となら、最高の思い出作れると思っただから——今まで  
生きてきて、いちばん楽しい日になったよ」

早智、静真の頬に口つける。

早智「ほんとのほんとに、ここまで」

静真「うん」

早智、静真を見て微笑む。

○阪急百貨店・エスカレーター

並んで昇っていく静真と早智。

○前同・化粧品店

陳列された化粧品を見て歩いている早智。その後

ろに静真。

静真「美子ちゃんと香奈ちゃんに口紅買ってんやろ、も

うええやん」

早智「うるっさいなあ。わたしのものまだなにも買っ

てないのっ」

静真「化粧品なんか東京でもなんほでも買えるやろ」

早智「今日ここで買うことに意味があるのっ！ もう、

高倉君女心を全然わかってない！」

苦笑いをする静真。

香水のコナーで立ち止まる早智

早智「あ」

静真「ん？」

早智「ヘアラン・ドロン」だって」

静真「ほんまや。そんな香水あるんや」

陳列された香水「ヘアラン・ドロン」を見る二人。

静真「プレゼント、するわ」

早智「え」

静真「こっちのやったら、買える」

静真「アラン・ドロンのミニボトルを手にして早智に見せる。」

静真「臨時収入あつたんや。貰ってくれる？」

早智「うん、ありがとう」

静真を見て微笑む早智。

○地下鉄・阪急四条河原町駅構内

梅田行きの特急電車が止まっている。

静真と早智、向かい合つて立っている。

早智「じゃあ」

静真「うん」

早智、後ろを向く。涙を拭う。前を向く。満面の

笑みを浮かべ静真を見る。

早智「今日のことぜんぶ、忘れない」

静真「うん、ほくも」

早智「あのさ、高倉君」

静真「なに」

早智「五年後、また会いたい」

静真「五年後」

早智「うん、五年後。エンジェルスのサチじゃなくなつ

たら——そのとき、また電話する」

静真「うん」

早智「会ってくれる？」

静真「会うよ。絶対会う」

早智「ほんとに？ 覚えててくれる？」

静真「ほんまや。絶対や」

強くうなずく早智。小指を立てた右手を差し出す。

静真「え？」

早智「げんまん」

静真も右手を出し、小指を立てる。二人小指を絡ませて。

早智「じゃあ」

静真「うん」

静真・早智「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーま

す。指切った！」

笑う二人。発車のベルが鳴る。特急電車に乗り込

む早智。

静真「ずっと応援する。エンジェルスのサチを。これか

らずっと応援する」

微笑み、うなずく早智。

静真「また、リクエスト書く。給料ためて、レコードプ

レーヤー買って、レコードも買う」

うなずく早智。

静真「五年後、待つてる。ほんまに待つてる」

うなずく早智。

ドアが閉まる。発車。

窓越し、車両の中から小さく手を振る早智。

頭の上で大きく両手を振り続ける静真。

遠ざかる梅田行き特急電車。やがて見えなくなつ

て。

静真、ずっとそのまま立っている。

○へあかつきハイツン外階段

おかもちを持って外階段を上がっていく静真。

○前同・二〇三号室前

部屋の外に置かれた皿を、おかもちの中に片して

いく静真。戸が開く。若い男が飛び出すように出

てくる。驚く静真。

翠「出ていけっ！ このボケっ！」

男「言われんでも出ていったらあー！」

翠「これで終わりや！ 二度と来るな！ あの女触った

手でうちの体触つてみい！ 殺したるからな！」

男「言われんでも分かつてるわあ！」

一度とおまえのとこなんか来るか、ボケ！」

階段を駆け下りていく男。

憤怒の表情で立っている翠。呆然としている静真

に気づく。

翠「ああ、静真ちゃん」

小さく会釈する静真。

翠「タイミング悪いなああんた。えらいとこ見られて

しもた」

静真、立ち去ろうとする。

翠「待って、静真ちゃん」

静真「はい？」

翠「部屋、入って」

静真「え」

翠「ええやん」

静真「いや、仕事があるんで」

翠「五分だけ、ちょっとだけ。な、お願い」

翠をじつと見る静真。

○前同・二〇三号室内

修羅場の後、散らかっている室内。

翠「えらいことなつてもうた、ははは」

翠、部屋をかたづけかけるが、うずくまってし

まう。そのまま嗚咽する。

静真「あの——」

翠「ごめん、ごめんな静真ちゃん。仕事あるのにな」

静真「いえ」

翠「なあ、ちょっとこっち来て静真ちゃん」

静真「え」

翠「こっち来てって言うてるん」

静真「あの——」

翠「来てえや、早お！」

翠の側に立つ静真。

翠「ごめんな大きな声だして。ほんまにアホやなうち」

静真の手を取り、その手を自分の肩に回させる翠。

驚く静真。

翠「寒いんや。ほんまに寒いわ。うちな、男と別れたらいっつも寒なんねんよ。五分だけ、五分だけや。こないしてて。お願いや、ひとりにしやんといて。五分だけこないしてて」

静真「——はい」

翠「こんなんばかりや、なんでやろ。うち、いっつもこんなんや——」

嗚咽する翠の肩を抱きしめる静真。

○（バラック）店内（夜）

営業中。焼き台の前に立っている静真。

カウンターで飲んでる翠。

翠「風邪なんか嘘や」

静真「え？」

翠「静真ちゃんに店任せられるようになったから、大将嫁さんと家で乳くり合っつてんねや」

静真「そんなことないです。ほんまに昨日しんどそうやっただから」

焼き台の上に手羽先を四つ並べていく静真。

○前同・静真の部屋（夜）

床にレコードプレーヤーが置かれている。壁にはエンジェルのポスターと早智のポスターが貼られている。

静真、壁に立てかけていたエンジェルのEPレコード（ラッキーカーガールにご用心）をプレーヤーの上に置く。流れて来る三人の歌声。静真

リズムを取りながら聴き続ける。

○テレビ放送画面

①ベストテン番組

司会者（男）「今週の第八位。先週の十四位から一気にランクイン！ 初登場 エンジェル 『天使の羽音』！」

司会者（女）「エンジェルの皆さん、どうぞ！」

元氣よく登場する三人。画面向かって右から香奈

美子、早智の順で並び立つ。

司会者（男）「初めまして」

三人「初めましてっ！」

司会者（女）「うわー、元氣がいいわねえ。じゃあテレビの向こうの皆さんにそれぞれ自己紹介しましょうか」

美子「はい！ 市川美子です。よろしくお願いします！ 初登場八位、本当にうれしいです！ ありがとうございます！

います！」

香奈「杉原香奈です！ よろしくお願いします！ 今日

この場に立てて、本当に夢みたいです！」

早智「吉沢早智です。よろしくお願いします！ 精一杯歌い続けるので、これからもエンジェルスを応援してください！」

美子「三人そろって——」

三人「エンジェルズです！」

司会者（男）「では早速歌っていただきましたよう！ 今週第八位、初登場エンジェルズで『天使の羽音』！」

イントロが鳴り、セットへ駆け出

す三人。

○（バラック）店内（夜）

カウンター席で砂肝とセセリをアテに呑んでいる翠。焼き台の前に立っている静真。店のテレビが『天使の羽音』を歌うエンジェルスを映し出している。翠、テレビを見上げ。

翠「どの子？」

静真「え？」

翠「静真ちゃんがデートしたん」

静真「——師匠、最近しゃべりでかなわん」

翠「なあ。風邪治ったとたんに天橋立に二泊とかなんやねん。いっぺんに嫁さん孝行になってしもてからに。

チー大将の静真ちゃんに甘えすぎや」

静真「ほくなんか、ほんまにまだまだです」

翠「なあ、どの子？」

静真「——左の子です」

翠「名前は何？」

静真「サチです。吉沢早智」

翠「へーえ、かわいらしい子やん」

テレビに映る早智を見る静真と翠。

× × ×

精算を済ませ、店を出ようと戸を開ける翠。

翠「いやあ、いやらし。雨降ってるやん」

静真、翠の横に立ち。

静真「気いつかへんかった。あの、奥に傘あるんで取っ

てきます」

行きかける静真の手を取る翠。驚いて翠を見る静真。翠「知ってる？ こんなん遣らずの雨って云うんよ、静真ちゃん」

微笑んでいる翠。その手を自身の胸に当てがう。

驚く静真。

翠「エンジエルのサチは、おっぱい触らせてくれたりせえへんかったやろ」

静真「……」

翠「うちなあ、あの日から夜が来ると寒なんねん。寒いままやねん」

静真「翠さん」

翠「女の気持ちムダにする男はカスやつて、言ったことあるやろ、静真ちゃん」

○テレビ放送画面② ホール公開の歌番組

バンドをバックに元氣いっぱい歌っているエンジエルス。その映像に静真と翠の声が重なる。

翠（声）「ありやりや」

静真（声）「——ごめんなさい」

翠（声）「気にせんでええんよ。最初は誰かてそんなもんや。なあ、拭いて——ちよつと、なに凹んでんのよ。ほんまにかわいいなあ、あんだ。あ、ちよつと心臓バクバク云うの小さなってきた。今度は上手いこといくから、安心しいな」

○テレビ放送画面③ スタジオ生放送の音楽番組

男女の司会者の横に立っているエンジエルス。それぞれの手にと×の札を持っている。

司会者（女）「ということで人気沸騰中のエンジエルの三人に視聴者の皆さんからたくさん質問が届いてますので、歌の前にいくつか答えてもらいましょ

う」

司会者（男）「いいですか、正直に答えてよ。正直にね」

美子「あー、なんかドキドキする」

司会者（女）「よーし、これからいっちゃおう。男の子とデートしたことがある。マルカバツかー？」

全員サツとバツを上げるエンジエルス。

司会者（男）「えー、本当かなあ」

三人「本当です！」

司会者（男）「ムキになるところが怪しいなあ」

香奈「本当ですよ。わたしたちレックスンばかりでそんな余裕なかつたですもん」

美子「そりゃ憧れはありますけど」

司会者（女）「サチちゃんは何？」

早智「そうですね。いつか、素敵な人と素敵なデートをしてみたいって思います。でも今は、ファンの皆さんが恋人です。ねー」

美子・香奈「そうです」

司会者（男）「あーつと、残念ながらここで時間！三人への他の質問は次回登場したときにつてことで。

それでは歌ってもらいましょう。エンジエルスでチャート初登場三位『ラブハートはクレッシェン

ド』！」

イントロが鳴り、セットへ駆け出す三人。

○へあかつきハイツン二〇三号室（夜）

部屋に居るのは静真。テレビの前に座り『ラブハートはクレッシェン』を歌うエンジエルスを見ています。アップになる笑顔の早智を見ている。

× × ×

夜更け。炊事場。ガスコンロの上にフライパンを乗せ、手羽先を焼いている静真。

翠「たらくいま〜」

したたか酔った翠が帰って来る。後ろから静真に抱き着く。

静真「おかえり」

翠「焼き上がり〜。グッドタイムングや〜ん」

静真「だいたい、帰ってくる時間分かつてきたから。けど、ほんまに手羽先好きやんね」

翠「そうやあ。うちはほんまに手羽先好きや。静真ちゃんとおんなじくらい好きや」

翠、静真を向き直らせ顔を手挟みキスをする。一瞬驚く静真だが、すぐに応える。

唇を絡めあう濃厚な二人のキス。

× × ×

布団の上でセックスをしている二人。

仰向けになった静真に跨り、翠が激しく腰を振っている。

翠「元氣いっばいや。中でビクビクしてるわ、静真ちゃん」

喘ぐ翠。激しく腰を突きあげる静真。

翠「ああんっ！」

のけ反る翠。二人同時に果てる。

× × ×

布団の上に横になつて二人。翠に腕枕してやっている静真。

翠「お師匠さんになんか言われたやろ」

静真「え」

翠「うちのこと」

静真「——べつになんも」

翠、静真の頬をつねる。

静真「いつっ」

翠「隠さんでもええ。うちが言われてんから、この前」

静真「あの、なんて」

翠「先のある身や、弄ぶんやったらやめたつてくれ、言うてなあ。静真ちゃんはなんて言われたん？」

うてなあ。静真ちゃん

はなんて言われたん？」

うてなあ。静真ちゃん

はなんて言われたん？」

うてなあ。静真ちゃん

はなんて言われたん？」

うてなあ。静真ちゃん

静真「……」

翠「正直に言うてみ」

静真「——深入りするな、言うて。水商売の女に手を出すのは早すぎる、言うて」

翠「ははっ。自分かて水商売のくせして。職業差別や、なあ」

じつと天井を見上げている静真。

翠「お師匠さんの言うことやから、聞かなあかんなあ」

翠、静真の右手を取り、見つめる。小指を口に含む。されるがままになりながら、首を横に振る静真。

翠「深入りしたらあかんよなあ」

小指を嘗め続ける翠。首を横にふる静真。

翠「そうや。弄んでんねや、うちはあんたのことを」

静真「——それでも、かまへん」

ふいに静真の上に覆いかぶさる翠。

翠「なあ、四年後どないするん？」

静真「え？」

翠「エンジェルスの子ちゃんとか会うんか？」

静真「——そんなん、もう忘れてしもてるわ」

翠「いつべんに人気出たもんなあ。けど分からんでえ。

なんちゆうても初めてのデートでした約束や。女はそ

ういのちちゃんと覚えてるもんなんやから」

静真「芸能人の気まぐれや、あんなん」

翠「ほんまは会いたいんやろお。電話あつたら会いに行

くんやろお。怒らへんから言うてみ」

静真「……行かへんよ、そんなん」

横を向く静真。その顔を手挟み、前を向かせる翠。

翠「ほんまに行かへん？」

静真「行かへん」

うなずく翠。

翠「忘れさせてしもうたる、エンジェルスの子のことなんか」

静真を抱きしめる翠。強く抱きしめ返す静真。

○琵琶湖・近江舞子水泳場

砂浜を手を繋いで歩く水着姿の静真と翠。

○同・浅瀬

翠の手を曳いている静真。翠、バタ足で湖面をバ

チャパチャしながら。

翠「琵琶湖はベタベタせんのがええなあ」

静真「うん」

翠「波も小さいし」

静真「うん」

砂浜のスピーカーからエンジェルスの曲が流れて

くる。

翠「エンジェルスや」

静真、無言。

翠「エンジェルスやで」

静真「——うるさい」

翠「なんて曲？」

静真「知らん」

翠「嘘ばかり。なんて曲？」

静真「知らんて」

翠「静真クン、なんて曲ですか〜っ」

静真「……『渚のサンシャイン・ボーイ』」

翠「知ってるやんっ！」

手を離し、静真を抱きつく翠。

静真「うわっ！」

そのまま強引にキスをする翠。湖に沈む二人。

○嵐山・渡月橋

肩を並べて橋を渡っている静真と翠。翠、紅葉している山を見やうて。

翠「きれいやなあ、ほんま」

静真「うん、きれいや」

翠「知ってる？ 渡月橋渡ったカップルは別れるんや

で」

静真「——嘘や、そんなん」

翠「ははっ、嘘か」

静真「嘘に決まってる」

翠「最初のデートもこやった」

静真「え」

翠「十六のとき。中学出て最初に働いた靴下工場の工員

さん。うちの初めての人や。どうしてるんやろ。結婚

して、子供とかいてるんやろなあ」

静真「——」

翠「それから、えーっと何人や。八人か。静真ちゃんが

九人目やな」

翠の手を取る静真。

翠「ピンサロで働いてたこともあるんやで。五人目のと

きか。他に女出来て出て行ったけどな。ヒモに愛想つ

かされてたら、うちもどうにもならんなあ、って死

にたなつたわ、あときは」

繋いだ手を強く握る静真。

渡月橋を手を繋いで渡っていく二人。

○（あかつきハイツ）二〇三号室（夜）

大晦日。十四インチのテレビに映し出されている紅白歌合戦をこたつに入って見ている翠。炊事場

で

調理していた静真が、年越しそばの丼が二つ乗っ

た盆をこたつの上に置く。翠と差し向いにこたつに入る。

井を手に取る翠。静真も。

静真「いただきます」

翠「いただきます」

そばをすすり始める二人。

翠「やつぱり鶏で出汁とったらおいしいな」

静真「うん。皮を二回炙るんがコツや」

翠「もう立派な料理人やな、静真ちゃんも」

静真「まだまだや——けど」

翠「けど？」

静真「いつか独り立ちしたい。それで」

翠「それで？」

静真「翠と結婚したい」

そばをすする静真。

翠「なあ、ポスターどないしたん？」

静真「え？」

翠「部屋に貼ってあったエンジェルズと

サチちゃんのポスター」

静真「……はがした」

翠「捨てたん？」

静真「……」

翠「なあ、捨てたん？」

静真「押し入れに入れたある」

翠「それ、うちが捨てろって言うたらどないする？」

静真「——捨てるよ」

翠「また嘘つく」

静真「嘘ちやう。捨てる」

翠「ははっ。言わへん、そんなん」

静真「え」

翠「うち、そんな意地悪な女とちやうで」

静真「——なんやねんな、ほんま」

翠「ふふっ」

そばをすする二人。

翠「あ、エンジェルズや」

テレビに目をやる二人。きらびやかな衣装を身に

まとい『ラブハートはクレッシェンド』を歌い

始めるエンジェルズ。

翠「たいしたもんやなあ。デビュー二年目で紅白や」

テレビ画面 アップになる早智を見つめる静真。

翠「『トそうよ恋のココロはクレッシェンド 日ごと強

くなるわ あなたへの思い』

エンジェルズの歌声に合わせて口ずさむ翠。テレ

ビから目を離しそばをすする静真。

○〈あかつきハイツ〉外階段(夜)

階段を上がっていく静真。

○前同・二〇三号室前(夜)

ドアに《静真へ。友達と一泊旅行に行ってきた

す》の張り紙。しばらく見てからはがす静真。

折り畳み、ポケットへ入れる。階段を降りていく

静真。六角通りを歩く静真の姿に、のちの翠との

会話が重なる。

静真(声)「翠」

翠(声)「なに」

静真(声)「友達って誰や」

翠(声)「ん？ 隣のスナックのアサミちゃんや。息抜

きしようというて有馬温泉行ってきた。気持ちよかつた

わ」

静真(声)「そんなこと言うてへんかつたやないか」

翠(声)「急に決めたんやもん。なに、いちいちあんた

に断らな、うちは友達と息抜きもできひんの。あほ

くさ」

静真(声)「翠」

翠(声)「そやからなに！ あんた最近妙にしつこい

で」

静真(声)「——先月から始まったあれ、絶対やらなあ

かんのか」

翠(声)「あれって？」

静真(声)「そやから、客と、喫茶店とか他の店寄って

から店にいくやつ」

翠(声)「ああ、同伴。そうや、もつと早うやってたら

よかつたって、ママ言うてるわ。実際うちのギヤラ

も全然前と違うし。チップまでくれるお客さんいてる

しな——なに、気に入らんのか」

静真(声)「気に入るわけないやろ、そんなもん」

翠(声)「——あんた、やつぱり水商売の女とつきあう

の、早すぎたのかもな」

ぶすつとした顔で六角通りを歩い

ていく静真。

○前同・店内(夜)

ビールを飲んでいる静真。カウンターを挟んで立

つている翠。

翠「お店には来てほしくないって、言うてへんかつた？」

静真「俺の勝手やろ、そんなん」

扉を開けて入ってくる背広姿の客四人。

翠「あつ、城所さん。いらっしやい」

城所「言うてたとおりのつれもて行こら、や。マリエ

ちゃん」

翠「いやあ、嬉しわあ」

ボックス席に座る四人におしほりを持って行く  
とする翠。すれ違いざま静真に。

翠「本名で呼んだりしなや」

ボックス席で愛想よく四人に接客する翠を見る静真。

○ハラック〈店内〉(夜)

営業中。焼き台の前で鶏を焼いている静真。浄雲と談笑している次郎。

○へあかつきハイツ〈外階段〉(夜)

階段を上がっていく静真。

○前同・二〇三号室前(夜)

ドアに《静真へ。アサミちゃんと有馬温泉に行きます》の張り紙。

はがす静真。クシヤクシヤに丸め、叩きつける。

○ハラック〈店内〉

開店前。仕込みをしている静真。奥から現れた次郎が、静真の打った串を手取る。

次郎「話にならない」

静真「え」

次郎「全部捨てえ。こないな串焼いて客から金もらいうわけにいかに」

静真「師匠……」

次郎「今日はもう上で寝とけ」

串を打ち始める次郎。棒立ちの静真。

次郎「聞こえたやろ。二回言わずな」

静真「すみません」

厨房を出る静真。一回へと階段を上がっていく。

× × ×

次郎が串を焼いている営業中の店内。カウンター席に浄雲が座っている。静真が降りてくる。

浄雲「お、静真ちゃん、今日はどないしたんや」

静真「はあ——あの、師匠」

次郎「どこへなど行け」

静真「すみません」

店を出る静真。

浄雲「どないしたんや、静真ちゃん」

次郎「アホが。そやから言うたんじゃ」

ため息をつく次郎。

○路上(夜)

六角通りの踏切を超える静真。

○へあかつきハイツ〈二〇三号室前〉(夜)

ドアにもたれて立っている静真。外階段から翠が上がってくる。静真を見て立ち止まる翠。また歩き出し部屋の前までやってくる。鍵をノブに差し込み回す。ドアを開ける。

翠、静真を見て。

翠「入りにいな」

室内をコナす翠。

○前同・二〇三号室・室内

服を脱ぎ始める翠。その様子をじっと見ている静真。

翠「またアサミちゃんと温泉入って息抜きしたなってなあ——って言うたらあんた信じるか？」

静真「翠——」

翠「そうや。男とや。あんたが前に店来たときに後から来た城所さんや。同伴しただけでチップぎょうさんくれる太客や。彼、和歌山のごつい資産家の三男坊でなあ。北山でブティック三つも経営してるねん。すこいやる。実家には寄らんかったけど、市内の旅館に泊まって観光してきた。ええところやったで和歌山。まだなんか訊くことあるか」

静真「翠、おまえ——」

翠「気安う名前呼ばんとつてえや！ なにが『おまえ』や！ ええわ、教えたる。セックスしたわ城所さんと。最初はほんまに有馬温泉や。そのとき初めてしたわ。あんたとうてコンドームなしや。羨ましいやろ。プロポーズされてんよ、うち。今度親に紹介するつて言うてくれてんよ城所さん。これで満足か？」

静真「プロポーズつて」

翠「受けたで、もちろん。なあ、あんたもしかして本気でうちと結婚できるやなんて思ってたん？ アホちゃう。なんでうちがボロの焼鳥屋の小僧さんと結婚せなあかんのん。言うたやろ、弄んでただけやつて。あんたもそれでええつて言うてたやん。それともなに、あんたうちのこと幸せにできる自信あるん？」

静真「……」

翠「あるん！」

静真「翠」

翠「年上の女とええ思いできたんや。ありがたいて思つてほしいわ——な、きれいに終わりにしよ。もう店にも行かんし、出前頼むこともない。あんたももうここには来んといて。店にも絶対来んといて。道で会うても声かけんといて」

呆然と翠を見ている静真。

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

翠「……」

静真「……」

○前同・通路(夜)

力なく歩く静真。階段を降りようとしたところで

二〇三号室のドアが開いて、翠が顔を出す。

翠「なあ、ほんまに来んといてや！ しつこうつきま  
とったりしたら警察呼ぶからな！ ほんまやで！」

ドアを激しく閉める翠。

力なく階段を降りていく静真。

○前同・二〇三号室(夜)

部屋に戻り壁に背中を預ける翠。のままするずる

と床に尻をつける。

翠「あつ、あつ、あつ……ごめん……静真ちゃん、ご  
めん……」

泣き出す翠。

翠「……ごめん、静真ちゃん、大好きや。いちばん好き  
や。好きや、好きや、あんたのこと……ごめんうう  
……けど、うちかて、うちかてな……許して、許して  
静真ちゃん……寒い、寒いわ静真ちゃん……抱きしめ  
てえや、なあ、なあ、なあ……」

我が身を抱きしめ、嗚咽する翠。

○(ハバラック)店内(夜)

暖簾をしまっている次郎。そこに戻ってくる静真。

軽く会釈をして階段を上ろうとする静真。

次郎「静真」

静真「はい」

次郎「明日、今日といっしょの串打ったら、焼きは二度  
と任せん。ええな」

静真「——はい」

階段を上っていく静真。

○前同・二階。静真の部屋(夜)

布団に入っている静真。何度も寝返りをうつ。眠  
れない。不意に左手の小指がピクピクと震える。

小指を見る静真。手を伸ばし枕元に置いたラジオ  
のスイッチを入れる。

D J (声)「へはい、というわけで、本日のゲストは今  
をときめくエンジェルズのお三方です。こんばんは  
——」

驚く静真。ラジオを見る。

三人(声)「へこんばんは——」

美子(声)「へミコです！——」

香奈(声)「へカナです！——」

早智(声)「へサチです！——」

美子(声)「へ三人そろって——」

三人(声)「へエンジェルズです！——」

D J (声)「へ相変わらず元気がいいねえ。こつちまで  
元気になつちやうよ——」

美子(声)「へ元気がいいのだけが取り柄の三人で  
す——」

香奈(声)「へたたのバカじゃん、それじゃ——」

す——

三人の笑い声が響く。

D J (声)「へカナちゃんが『ドリーム・スコール』  
に続いてセンターで歌ってるんだよね新曲『なみだ色  
ソナティーネ』も——」

香奈「へはい。リードボーカルがんばってまうす——」

D J (声)「へで、なんとなんとこの曲はサチちゃん  
が作詞に参加してるんだよね——」

早智(声)「へはい。作詞家の中川先生といっしょに作  
らせていただきました——」

D J (声)「へすごいなあ、作詞家デビューだ。けどこ  
の曲、前の曲とずいぶん雰囲気違って、切ないという

か哀愁を帯びてるというか、すごく大人っぽい感じだ  
よね、カナちゃん——」

香奈(声)「へはい。ちょっと背伸びして歌ってます。

でもこんな歌詞書いちゃう、いつもセンチメンタル真  
つ最中なサチに影響受けるから哀愁の方は大丈夫で  
す——」

早智(声)「へもう、ちょっと、やめて——」

D J (声)「へえ、なにそれ、どういうこと——」

美子(声)「へサチはねー、サチはねー。アラン・ド  
ロン様にとつても会いたいの。でも会えないの。だ  
から悲しい悲しい乙女なんですよお——」

早智(声)「へだからもうやめてってばあ——」

D J (声)「へサチちゃんはアラン・ドロンが好き  
なんだ。また渋いねえ。会いたいくらい好きなのか。

でもさ、全国のサチちゃんファンの男の子はそれ聞い  
てショック受けるんじゃない？」

早智(声)「わたしのファンは、わたしの気持ちを大事  
にしてくれる人ばかりだから大丈夫です！」

香奈(声)「なんか上手いこと言ってる——」

早智(声)「うるさい、カナ」

D J (声)「そうか。じゃあさ、サチちゃん、アラ  
ン・ドロンに告白しちゃうおうこで——」

早智(声)「へは？ え？——」

D J (声)「へフランスまで聞こえてるかもよ、この  
放送——」

美子(声)「へ聞こえてない——」

D J (声)「へいや、分からないよー。恋する乙女の  
気持ちは海をも超える！ はい、じゃあサチちゃん、  
アラン・ドロンに今の素直な気持ちを、三、二、  
一、キュー——」

早智(声)「へ——アラン・ドロンさん。ずっとずつ

と大好きなままです。いつかきつと会いたいです——  
ちよつともう、なにこれ——」

美子(声)「へヒューヒュー。まいっちゃんなあ」

香奈(声)「へアラン・ドロン様に恋する乙女サ

チ——」

早智(声)「へ怒るよ、ほんともう——」

DJ(声)「へははは。ケンカしないの。じゃあサチ

ちゃんの熱い愛の告白の余韻が残るままエンジェルス

で——はい、三人でタイトルどうぞ——」

三人(声)「へ『なみだ色ソナティーネ』——」

イントロが流れだし、エンジェルスの歌声がラ

ジオから響く。じつと天井を見ている静真。

エンジェルス(歌)「へねえ 今どこに

いてなにをしているのあなた——」

静真、起き上がる。押し入れの戸を開ける。丸め

て立てていたポスターの輪ゴムを外し、その天地

を持ち、広げる。バストショットの早智がにっこ

りと微笑んでいる。曲が早智のソロパートになる。

早智(歌)「へこんなに逢いたいのに いつも独りぼっ

ち 冷たい雨に 夜ことうたれてるのよ わたし——

——」

静真、泣く。涙がポスターの早智の顔にこぼれ落

ちていく。

#### ○次郎の家・居間(夜)

差し向ってこたつに入り、すきやきをつつきな

がら紅白歌合戦を観ている静真と次郎。

次郎「去年の紅白はどこで観たんや。おまえうちに誘っ

ても断ったやろ」

静真「え? はあ……」

次郎「翠ちゃんとか」

静真「——はい」

次郎「先月結婚したんやて。店もやめたそうや」

静真「そうですか」

次郎「苦労してきた子やからな。上がりがブティックの

奥様で万々歳や」

静真「ええ、そうですね」

瓶ビールを差し出す次郎。軽く頭を下げ受ける静

真。

次郎「恨んでへんのか」

静真「そんなのは、はい」

次郎「男にしてみろうたし、酒も覚えさせてもろうた。

おかげでこないして差し向かいで飲める」

グラスのビールを呷る静真。

次郎「ほら、肉食え静真。近江牛やぞ、どんどん行け」

静真「はい、いただきます」

次郎「おつ、出てきた出てきた。エジェルスや」

テレビに目をやる二人。画面の中、エンジェルス

が『なみだ色ソナティーネ』を歌っている。

次郎「レコード買ったりしてるんか?」

静真「——はい、一応」

次郎「そら買わななあ。なんせ天下のエンジェルスのサ

チとテートしたことある男やもんなあ、おまえは」

静真「それ、もうええですよ」

次郎「なんでや、ほんまなんやからかまわんやないか。

コンサートとかには行ったことあるんか?」

静真「いえ」

次郎「なんでやあ、行ったらんかい、行ったらんかい。

来年は行け。仕事休んでもかまへん、行け」

静真「そなん、ええですよ」

台所から次郎の妻、琴絵(33)がそばの丼が二

つ乗った盆を持って来る。

琴絵「ちよつとあんた、はや絡み酒? 静真ちゃん困つ

てるやないの。ごめんねえ、この人静真ちゃんとお酒

飲めるのが嬉しくてしかたないんよ」

次郎「なんやおまえ、もうそば持って来たんか。まだわ

しらすき焼き食べてるやないか」

琴絵「いっしょに食べたらええやないの」

次郎「せわしないなあ。静真、そばも食え、そばも。肉

乗せて食え」

静真「はい」

そばをすすり始める二人。

琴絵「静真ちゃんほんまにええ子やねえ」

次郎「もてるなあ静真。もてもてや。さすが女殺しの静

真やな」

静真「——やめてください」

次郎「ははは。照れとる。旨いか静真」

静真「はい。旨いです」

そばを食べる静真を微笑んで見ている次郎と琴絵。

#### ○青空

夏。太陽がキラついている。

#### ○ヘラックン入口

打ち水をしている静真。空を見上げ汗を拭く。打

ち水を終え、店に入る。

#### ○前同・店内

カウンターの椅子に座り、アイスクャンデーを食

べながらスポーツ新聞を読んでいる次郎。

次郎「しかしビックリしたよなあ」

静真「はい?」

次郎「エンジェルスや、エンジェルス。解散発表って、

なにがあつたんや」

スポーツ紙の裏二面を静真に見せる次郎。へエン  
ジェルズ来年三月で解散！の文字が大きく載つ  
ている。

静真「ああ」

厨房に入り、仕込みを始める静真。

次郎「なんや。薄い反応やな、おまえ」

静真「そら、いつかは解散しますよ」

次郎「いや、そうやけどやな。テレビ占けたら見やへん  
日いないような人気バリバリの最中に解散せんでもえ  
えやないか。ケンカでもしたんかいな、これ」

静真「それはないと思いますよ」

次郎「——ふーん。コンサートいつやった？」

静真「来月、円山公園の音楽堂です」

次郎「そうか。楽しみやな。久々、愛するサチちゃん  
に——あつ！」

静真「はい？」

次郎「そうか、そうか。分かったぞ。会うな、おま  
え。コンサート終わってから会う約束してるなサチち  
ゃんと。どないして連絡とつたんや、え、言うてみ  
い」

静真「なにを言うてはるんですか。そんなわけないで

しょう。相手芸能人ですよ」

次郎「いやや凶星や。そやからエンジェルズ解散でも余  
裕のよつちやんか。かーっ、たまらんあ。続きが  
あつたわけや。アイドルいてこますかあ」

静真「勝手に妄想しとってください」

次郎「やるなあ、さすが女殺しの静真やなあ」

ひとりで盛り上がる次郎をよそに、苦笑しながら  
串を打ち続ける静真。

○円山公園音楽堂（夕方）

二五二人収容の円山公園音楽堂。野外の客席は  
ベンチタイプの椅子が扇形に広がっている。前列  
五席目までは、ハチマキをしてハッピを着た親衛  
隊が陣取っている。中央あたりのベンチ、端に腰  
掛ける静真。徐々に客席が埋まってくる。

× × ×

薄暗くなり、バックバンドのメンバーが登場。指  
笛、拍手。ドラマーのカウント。演奏が始まり、  
客席にいた誰もが立ち上がる。『ラッキークーガール  
にご用心！』のイントロが最高潮になり、エンジ  
ェルズの三人が舞台左袖から駆け足で登場する。  
大歓声の客席。全員が立ち上がる。早智をじっと  
見つめる静真。唄い出す三人。

× × ×

唄い終え、並び立つ三人。

美子「みなさーん、こんばんはー！」

観客「へこんばんはー！」

香奈「あれ、声が小さいぞー！ こんばんはー！」

観客「へこんばんはー！」

早智「もつともつと！ こんばんはー！」

観客「へこんばんはー！」

美子「ありがとうございます。エンジェルズです」

三人、深く頭を下げ礼をする。万雷の拍手。

美子「えー、突然の解散発表、驚かれたことと思います。

応援してくださっているファンの皆様にはたいへん申

し訳なく思っています」

香奈「わたしたち、結成したときから決めてたんです。

いちばんいい時に解散しようって。その日までわき目

もふらず頑張ろうって」

早智「青春の全てをエンジェルズに賭けてきました。そ

んなわたしたちのわがままを、どうか許してください  
——全国ツアー最終日、横浜スタジアムが終わるま  
で、コンサート、テレビ、ラジオ、精一杯、心をこめ  
て歌います！」

深く頭を下げる三人。大きな拍手がわきおこる。

頭を上げる三人。

美子「ありがとうございます——わたしたちデビュー  
してすぐ、キャンペーンでここ、京都にやってきました  
した。東京以外での最初のキャンペーンの地が、京都  
でした」

香奈「パチンコ屋さんの前とか、スーパーの駐車場とか、  
レコード屋さんの店先で歌いました。そんなわたした  
ちが今、伝統のある円山公園音楽堂のステージに立っ  
ています」

早智「あの日をおぼれたことはありません。思い出の街、  
大好きな街、ここ京都が最後のツアー出発の地です！  
思い切り歌います！ 今日最後まで楽しんでいって  
ください！」

美子「いくよ！ 『渚のサンシャイン・ボーイ！』」

イントロが始まり大歓声が沸き起こる。

× × ×  
唄い、踊る三人の姿。ずっと早智を見ている静真。

× × ×

ステージは無人。アンコールの声が客席から鳴り  
響いている。まずバンドメンバーが現れ、続い  
てエンジェルズの三人が現れる。客席向かって右  
から美子、早智、香奈の順で立っている。大歓声。

美子「アンコールありがとうございます」

深く礼をする三人。拍手が起きる。

美子「わたしたち、ステージから見える景色が大好きな  
んです——意外とはつきり見えちゃうんだよ。みん

なの顔」香奈「うん。京都親衛隊のみんな、最後までコールリードしっかり頼むよー!」

沸き上がる親衛隊

美子「わたしたちエンジェルズ、これから解散までに三枚のシングルを発表する予定です。明日発売のその第一弾は、この並びを見てお分かりのとおり、初めてサチがシングル曲でセンターをつとめます」

深く礼をする早智。声援が飛ぶ。

早智「ファンの皆様の前で歌うのは、今日が初めてとなります。ひとりで詞を書きました。聴いてください

『シークレット・デート』」

バックバンドがイントロを演奏し始める。客席の静真、ベンチとベンチの間の通路に立つ。リズムを刻みながら客席を見渡していく早智。静真に気づく早智。驚く。ステージの早智、客席通路の静真、見つめあう。静真、微笑んで右手を振る。動かなくなる早智。観客に背を向ける。涙を拭う。

早智の異変に気付いた美子と香奈、バンドに演奏をやめるよう指示する美子。騒めく客席。

ステージ上で三人が寄り添って話しをする。客席に目を向ける美子と香奈。静真を認める。早智の頭を撫でる美子。

両手を握り振る香奈。涙を拭いながら二人に何度も頷く早智。三人、ステージに向き直って。

美子「ごめんなさい。あのですね、サチが感極まつちゃったみたいです」

香奈「なんせセンチメンタル乙女サチなもので、許してやって」

笑いと拍手がおきる。うつむいている早智。早智に声援が飛ぶ。早智、顔を上げて。

早智「ありがとう。ごめんなさい。今度はしっかり唄い

ます。じゃあ改めて『シークレット・デート』拍手と歓声。バンドがイントロを奏で始める。唄い出すエンジェルズ。

エンジェルズ「トラブ・アット・ファー

ストサイト ふたりいつしよに  
ハブ・ア・クラッシュ・オン  
恋に落ちたの 昼下がりの街中

深呼吸 ダイアル回すの

震える指先 呼吸がはやくなる

初めてよ こんな気持ち

わたし 人見知りなのに

さあ あなたの街へ 行くのよ

ドアが開くの 待ちきれなくて

いま はだしの心で 駆けてく

弾けてしまえそう この胸

誰にも知られたくない

そうよ 二人のデートはシークレット

ときめきの街 秘密の 秘密の時間

モン・ポー・シュヴァリエ ナイトは

あなた

デイ・モア・チューム? 手つなぎ

歩くの

朝陽さす街中

肩並べ シネマを観るの

こぼれる涙 あなたに見られてる

初めてよ こんな気持ち

永遠(とわ)に忘れないこの瞬間(とき)

さあ もっと歩こうこの街

行きかう人の 流れにまかせて  
ほら 小指の糸が 見えるわ  
ずつつながったまま これから

誰にも知られたくない

そうよ 二人のデートはシークレット

きらめきの街 秘密の 秘密の時間

ねえ ゆびきりしよう 約束の

発車のベル 二人を急かしてる

ねえ 出会えた場所待ってて

強く抱きしめてね 今度は

誰にも知られたくない

そうよ 二人のデートはシークレット

たそがれの街 秘密の 秘密の時間

マイ・スウィーテスト・オンリー・ユー」

生き生きと唄う早智。間奏で静真を見て、笑顔を  
見せる。静真、微笑んで早智を見ている。

曲が終わる。後奏が鳴る中、いったん客席に背を  
向ける三人。振り返って最後のポーズ。早智、マ  
イクを口元に。通路の静真を見て。

早智「出会えた場所で、待ってて」

微笑み頷く静真。

早智も微笑んで頷く。

曲が終わる。大歓声と拍手。

アップテンポのイントロが鳴り始め、再び早智は客席向かって左側へ。

美子「わたしたちを翔びたせた歌！ 『天使の羽音！』」

飛び跳ねる三人。熱狂する客席。

静真に大きく手を振る早智。

早智に大きく手を振る静真。

唄い始めるエンジェルズ。

○京都ホテルオークラ・全景（夜）

○前同・宴会場（夜）

立ち飲み形式で、エンジェルズのコンサートの打ち上げが行われている。楽し気に飲み食いしているバックバンドのメンバーやスタッフ、その他関係者たち。

マネージャーである岡崎（39）

の前に立つエンジェルズの三人。

美子「岡崎さん」

岡崎「んう、なんだ」

美子「ちよっと夜風に当たってきたいんです。小一時間

ほど鴨川べり、散歩してきていいですか」

岡崎「ああ、散歩お？ なんだそれ」

香奈「三人で今日の反省会したいんですよ」

岡崎「んなもの部屋でできるだろうよ」

美子「せっかく京都来たんだから、夜の鴨川べり歩いた

っていいじゃないですか」

岡崎「ファンに見つかつたらややこしいことになるだ

ろうがよ」

香奈「夜だし、川つべりだし、そんなに人歩いてないから大丈夫ですよ。だいたいわたしたちが普通に歩いて

るなんて、だれも思いませんって」

岡崎「——しかたねえなあ。早く帰ってこいよ」

美子「ありがとうございます。じゃあ、行こうか」

岡崎に背を向ける三人。

岡崎「ああ、早智」

早智振り返って。

早智「はい」

岡崎「今日の『シークレット・デート』よかつたぞ。ラストのアドリブすっげえ決まってたわ。あれ定番に

しようや」

早智「ありがとうございます。でも、あれは今日だけなんです」

岡崎「なんでだよ。あれよかつたぞお、ほんとに」

美子「じゃ、ちよっと行ってきまーす」

岡崎に背を向ける三人。

岡崎「なあ早智。定番にしようや、あれ」

振り向かず宴会場を出ていく三人。

かたまって三人。

早智「やつぱり、ついてくるの」

美子「——うん、残念ながら」

頷く香奈。

香奈「今日の早智、一人にしたら最後まで突っ走る」

早智「そんな、会っただけだよ」

美子「ここの門限は十二時。それまでに戻ってこれる自信ある？」

早智「あるよ、そんなの」

香奈「もしも高倉君が『部屋に来てほしい』って言った

ら？」

ハツとなり、うつむく早智。

美子「そんなことになったら大騒ぎになる。マスコミだ

つてかぎつける。でしょ？」

美子「解散まで待たなくていい。ただあんまり急

だつて言ってるだけ」

香奈「うん。もうちよっとだけがまんし

よ、早智。けど、ほんとにいるかな彼？」

早智「いる。絶対いる」

強く頷く早智。

御池通り（夜）

歩道に立っている三人。香奈が手を大きく振って

いる。タクシーが停車する。

タクシー車内（夜）

美子、早智、香奈の順で後部座席に乗り込む三人。

早智、運転手の西島（27）に告げる。

早智「西大路三条の三条会館までお願いします」

西島「三条会館って、パチンコ屋の？」

早智「そうです」

西島「——はあ」

発車させる西島。

早智の手を握る美子と香奈。二人の手を握り返す

早智。

× × ×

御池通りを走り続けるタクシー。

西島、バックミラーを直すふりをして三人をちら

ちらと見る。

西島「あの〜」

香奈「はい？」

西島「そんなことないって、思うんやけど。もしかし



うなずく静真。

静真「……あんなん、あんなただのアイドルの気まぐれやなんて途中から思ってた……」

早智「気まぐれだったら、わたし今ここにいないよ」

何度もうなずく静真。

静真「ラジオも聴いたんや。あの、アラン・ドロンさんへ、ってやつ」

早智「あれかあ。へへへ、あれもホントは台本。美子と香奈が作ってくれて持ってたんだ。DJの人はホントのアラン・ドロンに言ってるって思ってたけどね。オンエア前にさ、こっちの小指がピクピクしたの。だから、なんか絶対、高倉君、聴いてくれてるって思ってた」

静真の目から涙が落ちる。

静真「聴いてたよ、聴いてた」

早智「——その女の人は今でも？」

首を横に振る静真。

早智「よかった。でも高倉君、自分のこと、『俺』って言うようになったんだね。なんかかっこいい」

顔を上げ早智を見る静真、微笑んでいる早智。

早智「男の子だもんね。そういうこともあるって、思ってたよ」

静真「吉沢さん——」

早智「今、高倉君わたしの目の前にいる。それが、あの日から今日までの答え。それでいいんだよ——でも、会うのちよつとライジングだね。エンジェルスの子ぢやなくなる前に会っちゃった」

静真「うん」

早智「ずっと会いたかった。ずっと、ずっと」

静真「うん」

早智、ブランコの美子と香奈を見て。

早智「ねえ、ちょっとだけ向こう向いてー」

美子「えー、見えない間に二人でどこか行こうとかしてない？」

香奈「ダメ。見てる」

早智「行かない。どこにも行かない。二人の事裏切ったり絶対しない！ だからお願い、ちよつとだけ」

美子「あーあ、仕方ないなあ」

香奈「まあ、こうなることは分かってましたけどね」

反対側を向いてブランコに乗る二人。

早智「なによ、パージンのわたしだけなんだから、ちよつとくらいいいじゃない」

静真「そうなんか」

早智「ふふふ。美子は社長の長男で販促係長の友行さんと、香奈はバックバンドのベースのテツちゃんとおきあつてる。——絶対誰にしゃべっちゃだめだよ、これ」

静真「分かってるよ、そんなん」

早智「美子と香奈だったから続けられた。解散してもずっと連絡取り合おう、いっしょに旅行とか行こうって言うてるんだ」

静真「仲ええんやな、ほんまに」

早智「うん。三人そろってエンジェルスだもん。それは永遠」

静真「どうするん、横浜スタジアム終わったら？」

早智「うん。とりあえず半年ほど休む。それから三十歳くらいまでは芸能界にいて歌のお仕事してもいいかなって思ってるんだけど、でも——」

静真「でも？」

早智「両親にもたいぶお金遺せたからさ。焼き鳥屋の奥さんになるのも悪くないかなって思ったりもしてる」

静真「え——」

早智「解散したら何回も京都来る。マスコミに見つかったていい。そのときはエンジェルスのサチじゃないんだもん」

静真「うん」

早智「ずっとがまんしてきたんだよ、わたし」

静真「うん」

早智「年上の女の人に取られるのなんていやだ」

静真「うん、ごめん」

早智「そうだよ。わたしはずっと高倉君一筋だったのに。会えなくても一筋だったのに。ひどいよ高倉君」

静真「うん、ほんまにごめん」

早智「ねえ、名前で呼んで」

静真「——早智」

早智「静真」

二人、顔を寄せキスをする。唇を離し。

早智「あの日はほつぺただったね」

静真「うん」

早智「ほんとに、ほんとにわたし今のがファーストキスなんだよ」

静真「うん」

早智「言ってくれないの？」

静真「え？」

早智「『俺の部屋に來い』って」

静真「——それは、今は言えない」早智、静真をじっと見つめて。微笑み頷く。

早智「高倉君、全然変わってないね。あのね、十二月にもう一回京都での公演があるの。場所は京都府立体育館」

館」

静真「府立体育館か、すごいなあ」

早智「ねえ、連絡するから、その日の夜は同じホテルに

お部屋取って」

静真「——うん、分かった」

早智「絶対だよ。がまんできない夜はじぶんで慰めてきたんだよ。静真のこと思ってる」

静真「うん」

早智「分かってんの、ほんとに」

静真「うん」

早智「『うん』ばかり」

静真「うん」

早智「あははっ」

二人、また唇を合わせる。激しく口つけ合う。

美子「おーい、まだかあ、長いぞお」

香奈「いいならいいって言ってくれー」

二人の声が聞こえないかのように、静真と早智、抱き合い、むさぼるように互いの唇を求めあい続ける。

○物語冒頭に戻って・ヘラックン一階

静真の住んでいた部屋

次郎「早智ちゃん来たときはこの部屋に泊まってたんで」

静悠「この部屋に」

次郎「うん。最初るとき静真、そら照れくさそうに言うてきてなあ。あの顔忘れへんなあ」

静悠、二人の写真を見て。

静悠「このお写真はそのときに？」

次郎「ああ、わしが撮ったもんや」

静悠「そうですか」

静悠、壁のポスターを見やっつて。

静悠「けど、ほんまに色あせてないんやなあ」

次郎「浄雲から聞いたか」

静悠「はい。一回も貼り替えてないんでしょ、これ」

次郎「ああ、静真が当時に貼ったままだ。昨日貼ったみたいやろ——何回くらい来たかなあ早智ちゃん。いつもおんなじ運転手のタクシー、店の前に横付けさせてな。あの若い運転手は二人の事知ってた」

●インサート

（ヘラックン）の前に立っている静真。その前にタクシーが停まる。降車し、後部座席のドアを開ける西島。早智が降りる。見つめあう静真と早智を微笑んで見ている西島。

静悠「盛大なご葬儀やったようですね。

それもこの前動画で観ました」

何度もうなずく次郎。

次郎「なあボン。静真の骨、世話になるときな、隣のお守りも静真の骨壺に入れてええか。中はおんなじ、人の骨やよって」

静悠「骨——あの、それって」

次郎「うん。早智ちゃんのお骨や。葬式の時、ご両親に頼んで一カケ貰ったそうや。それからそないしてお守り袋に入れて、斃れる日まで首から提げてたんや」

静悠「そうですか。はい、分かりました」

次郎「うん、おおきに。けどそれもうちよつと先の話や。まだしばらくはこの二人、このままにしといてやりたいんや」

静悠「そしたら佐村さんも元気でおられませんか」

次郎「うん。二人のところに行くのはまだまだ早いわい」

静悠「僕、今晚もエンジェルズ観ますわ。円山公園音楽堂のコンサートも収録されてますねん。まだ観てへんから、今日はあれ観よ」

次郎「そうか。それ、静真が観に行ったやつや。ボンミ

たいな若い子に観てもろうて早智ちゃんも喜んでるやろ」

琴絵「静真ちゃんは妬いてるかもね」

笑う三人。次郎の骨壺と早智のお守り袋、（アラシ・ドロン）のボトルに目をやる。

静悠「親父から聞きました。減っていくんでしょ、この香水も」

次郎「うん、そうなんや」

静悠「揮発してるっていうわけでは？」

次郎「にしては勢いが速すぎる。あいつが死んでから、

何本買ったか分からん」

琴絵「なくなりかけたなら、うちが買いにいくんよ」

静悠「そうですか」

微笑む写真の静真と早智を見つめる次郎、琴絵、静悠。

○京福電鉄・四条大宮駅前

スマホを弄って人待ちしているマスクをした大学生の結衣（19）。同じく大学生翔太（19）がやってくる。

結衣「翔太おっそーい。待たせるとか信じられないんですけどー」

翔太「うっせーっの」

二人、手をつないで駅構内に入る。

○京福電鉄・車両の中

走っている京福電車。手を繋いで席に座っている結衣と翔太。乗車しているのは老婆かひとり。

結衣「かわいいよねこの電車。通称風電って言うんだよ。名前はけっこういかついけど、でもめっちゃかわい

い」

翔太「なんでもかわいいって言うよな結衣は」

結衣「そんなことないよ。わたしかわいいものしか、  
かわいいって言わないからさ。あー、人生初の嵐山だ  
ー。楽しみー」

× × ×

○西大路通り・歩道

手を繋いで歩く静真と早智の後ろ姿

○京福電鉄・西大路三条駅

停車する車両。ドアが開く。乗客はいない。発車  
する電車。

○前同・車両内

結衣「あれ？」

翔太「なに、どした？」

結衣「いい匂いする」

翔太「え？」

結衣、マスクを少しはずして。

結衣「うん、やっぱりする」

翔太もマスクを少し外して。

翔太「あ、ほんとだ。鼻いいな結衣」

結衣「これってさ、アラン・ドロンって香水の匂いだ  
よ」

翔太「は？ なにそれ」

結衣「一番上のお姉ちゃんがつけてた香水なの。だから  
知ってる」

翔太「ふーん。アラー——なんだった」

結衣「アラン・ドロン。むかしの外国の俳優の名前なん  
だって」

翔太「へーえ」

結衣「でも、急になんでだろ。不思議だよね」

翔太「あのおばあさんがつけてるとか？」

老婆を見る翔太。

結衣「ありえないでしょ、それ」

笑う二人。その向かいの席に手を繋いで十九歳の  
静真と早智が座っている。

車両が三条坊児童公園の前にさしかかる。指を  
さす早智。笑う静真。

身を寄せ楽しそうに話を続けている翔太と結衣。  
身を寄せ楽しそうに話を続ける静真と早智。

嵐山行き京福電鉄の一両電車が路面を走り続け  
ていく。